断罪希望の悪役令息はなぜか断罪から遠ざかる


CHARACTER
［登場人物紹介］
ロイド
コンラッドの側近であり幼馴染。
コンラッドの「腰巾着」
呼ばわりされて以来、
シャノンのことを毛嫌いしている。
ブラッド
シャノンの義弟。
シャノンからかつて
「まがいものの
侯爵令息」と呼ばれた
ことを気にしている。
コンラッド
ルテティア王国の第一王子。
シャノンの婚約者だが、
シャノンのことを
あまりよく思っていない。
アーロン
BLゲーム『愛は光の向こう側』の
ヒロイン（♂）。
孤児だったが神子候補として
貴族学院に入学する。
アレイスター
王宮内では目立たないように
過ごしている第二王子。
シャノンと関わっていくうちに、
ある決意を固める。
シャノン
第一王子の婚約者であり、
『茨姫』と呼ばれる
美貌の持ち主だが、
中身はポンコツオタク令息。

プロローグ

自分で言うのもなんだけど、僕には何一つＤＫらしい思い出がない。友達とくだらないことで笑い合ったり、ファストフード店に立ち寄って暗くなるまでダベったり、そんな普通の青春時代が僕にはない。

なにしろ子供時代をノホホンと過ごし、大きな反抗期もなく厨二をやり過ごし、過酷な入試も乗り越え――さあ高校デビューだ！　と思ったところで病魔に倒れたのだから……

非常に珍しい免疫系の疾患により五年ほど闘病しただろうか。

ベッドの上で悟りを開くに至った頃、ついに僕は白旗をあげ、家族の悲痛な嗚咽が響く中、暗い闇の中に誘われた。

◇◆◇

「う……、ここは……」

「シャノン様！　お気付きですか！」

「あ、あれ……、これは一体……」

「お身体の具合はいかがでしょうか。医者は細かな傷以外、目立った怪我はないと申しておりましたが」

「痛い……」

「あれだけの高さから落ちたのですから当然です。ですが、下が植え込みでようございました」

――誰？　っていうか、ここどこ？

落ち着いて周りを眺める。が、そこに居るのはいつもの看護師さんでもなければ泣きそうな顔をした母でもない。

ホテルのコンシェルジュみたいな男性が一人と絵に描いたようなメイドさんが一人、それから貴族のような服を身につけた青年が、ベッドの傍らに立ち、こちらを見つめている。

そもそも色のない病院の個室が、いつの間にかゴージャスな調度品が満載のアンティークな部屋へと変貌している。

これは一体……

状況が把握できない僕に次にかけられたのはひどく冷たい声だ。

豪華な刺繍の施された貴族服の彼は僕を「兄さん」と呼んだけど……、僕にこんな顔の兄弟は居ない。

「……兄さんがいけないのですよ。あんな場所でアーロンに難癖をおつけになるから」

「ブラッド様！　貴方様は弟でありながら兄でなく平民であるあの男を庇うと仰るのですか！」
僕を兄さんと呼ぶ、どこから見ても身分の高そうな青年に食ってかかったのは、あのコンシェルジュのような男の人だ。
「シャノン様は二階の窓から落ちたのでございますよ！　なぜお助けにならなかったのですか！　よもや死ねばいいと、そう思われましたか！」
「だ、黙れ！」
反論を許さないといった勢いの追及に、激おこな青年はまるで逆ギレのように怒鳴り返すと乱暴に扉を閉めて出ていってしまった。
それよりちょっと待って。
情報が、情報量が多い……！
――でも、今の会話だけでほとんどのことが理解できた気がする。
だって、シャノン、アーロン、ブラッド……それらはすべて、病室のベッドで僕が楽しんでいたBLゲーム『愛は光の向こう側』に出てくるキャラの名前なのだから。
『愛は光の向こう側』は分岐を選びながら自分だけのストーリーを作り上げる、いわゆるノベルゲームだ。
そしてシャノンが二階の窓から落ちた場面も、ハッキリと記憶にあった。
ノベルゲームとは始まりと大筋が大体決まっているものだ。ただ、分岐によって途中で差し込まれるエピソードと結末の話が変化していく。

この『愛は光の向こう側』において、シャノンの立ち位置はヒロイン（♂）と王子様の間に立ちふさがるちょっとしたアクセント、いわゆる悪役令息ってやつだ。
BLゲームらしく、この世界に恋愛、結婚の性別的区別はない。
そんな世界観で繰り広げられる男だらけの恋愛模様の中で、あの手この手でヒロインを虐めるストーリー上の賑やかし、それがシャノンの役割なのだけど――
僕がシャノン、シャノンか……。よりにもよって……
ここでざっくり説明しよう。
シャノンはこの国の侯爵令息。シャノンの父親はこのルテティア国で大きな権勢を誇るプリチャード侯爵家の当主だ。
シャノンが幼い頃に亡くなった母親は前々王の又姪にあたり、病床で愛息シャノンと第一王子の婚約をまとめあげて心残りなくあの世へと旅立っている。
そして、そんな王家の血を引く母の教育方針により、シャノンは天より高いプライドを育ててしまった。
シャノンは五才のときから、いずれ王太子となる第一王子コンラッドの婚約者として王宮に通い、とても過酷なお妃教育を受け続けている――という設定持ちだ。
そしてゲームシナリオの都合上、国王は領土を拡げるために戦場で陣頭指揮をとる最高司令官として位置づけられており、終盤までほとんど出てこない。
そのため国の政は主に王妃主体で行われる、というのがこの世界の大きな設定だ。

そんな背景もあり、将来王妃となるシャノンが受ける教育は、それはそれは厳しいものだ。だがシャノンはそんなお妃教育を泣き言ひとつ言わずにかれこれ十年続けている。

一方で、婚約者である第一王子は、シャノンがあまり好きではない。

シャノンが王宮を訪れても形式ばった挨拶をするとすぐに席を立ち、幼馴染である伯爵子息のロイド、シャノンの義弟であるブラッドを連れ出しては、わざと動物嫌いのシャノンが立ち寄れない馬場や訓練用の狩場で『屋外特訓』と称し遊んでいたのだ。

正直僕は当時からこの行動にはドン引いていた。BLファンタジーの王子様とは思えない陰険さだ。

もっともこの描写の前にはどれほどシャノンが高飛車か、というエピソードが挟まれているのだが……それにしてもないわ～。

……ここでお分かりだろう。僕はちゃきちゃきの腐男子だ。

ただ、その手のお話を読むのは大好きだけど、今のところリアルで男性を好きになったことはない。というか、思春期以降をすべて病室で過ごした僕には恋愛経験がない。だから真の性癖は分からないというのが正直なところだ。

話を戻そう。

場面は流れ、シャノンとコンラッドは十五歳で貴族学院に入学する。

そこに登場するのがヒロイン、アーロンである。

アーロンは、王命により特例で貴族学院へ入学を許可された孤児であり、神子候補だ。

このゲームで言う神子とは、『聖なる力』という、国の難事に重宝される、稀有な力を持つ存在である。そしてその『聖なる力』とは、非常に厳しい試練を乗り越えた、純粋な魂にだけ発現する奇跡のような力、という設定である。

アーロンは発現こそしていないものの、『聖なる力』に適性があると思われていた。

そのアーロンが入学を果たすと、同級生となったコンラッド、そして彼の側近であるロイド、義弟のブラッドまでもが明るく健気で優しいアーロンの虜になっていくのだ。

婚約者に二股をかけられてはシャノンが怒るのも無理はないだろう。

シャノンはことあるごとにアーロンに冷たく当たり、ときには酷い意地悪をしていたため、婚約破棄を望んでいたコンラッドによってついに卒業前のプロムでこれ幸いと断罪され、侯爵家からも追い出されて辛酸をなめることになる。

その後『聖なる力』に目覚めたアーロンは、コンラッドと国難を解決しながら最終的には国中から祝福されて末永く幸せに暮らす……っていうのがざっくりしたあらすじだけど、その合間合間のエピソードが分岐によって変わるのがノベルゲームの醍醐味だ。

さて、問題は今がストーリーのどのあたりかということ。

僕は、周囲の心配を余所に記憶の引き出しを探っていた。

といっても病魔に白旗をあげる直前まで楽しんでいたゲームだ。すぐに思い当たった。

このエピソードは、シャノンとコンラッドの過去や関係性がテキストロールで延々と流れた後に

出てくる、まさしくゲームのスタート地点である。
四月に入学する、日本の学期システムを反映させた貴族学院では、わずか三か月後の七月半ばから夏休みに入る。
今はちょうどその夏休みに入ったところだ。
ブラッドの誘いを受け、アーロンとアーロンにのぼせ上がった男たちは、プリチャード――つまりシャノンの屋敷へぬけぬけと遊びに来たのだ。
そこで運悪くアーロンたちと鉢合わせたシャノンは、彼らと言い合ううちに逆上し、結果アーロンに掴みかかったままバランスを崩した。そして正面階段を上がったところにある大窓に倒れ込み……、最終的にシャノンだけが落下し、美しいプラチナの髪を茂みに散らしたのだ。
なぜならアーロンには彼の身体を引き寄せる救いの腕が何本もあったからだ。
その内の一本がさっきここに居たシャノンの義弟ブラッドであり、もう一本がロイド、そしてあろうことか最後の一本が……シャノンの婚約者、第一王子であるコンラッドの腕だ。
あの王子は婚約者を見殺しにして想い人であるアーロンを庇ったのだ。
……シャノンは落下し、僕が今ここに居る。この身体の中にシャノンの存在を僕には感じられない。おそらく彼の魂は逝ってしまったのだろう。ノベルゲームの理から離れた空虚の世界へ。僕にこの身体を遺して……
可哀想なシャノン。十五で入院生活を余儀なくされた僕には、十五で散ったシャノンの無念が痛いほど分かる。

シャノン、せめて安らかに眠れ……
――でも、だからってなぜ僕がこんなことに！
「全員出ていって。独りにして」
張りのあるソプラノの声は、病院生活で慣れ親しんだ、やつれてかすれた声ではない。全員が部屋から出ていくと、ようやく身体の緊張が解ける。
……少し頭を整理しよう。
『愛は光の向こう側』の舞台は、ルテティアという王国である。
王には王妃と三人の側妃がおり、子供たちは上から順に第一王女、第一王子、第二王子、第三王子がいる。
主要なキャラは、まずさっきも話に出てきた第一王子のコンラッド。
ロマンスＢＬファンタジーには珍しく、繊細さの欠片もない、赤毛が憎たらしい顔によくお似合いの王子様だ。
二言目には「身分など関係ない！」とのたまうこいつは、自分が王子の身分に生まれたおかげで、その最大恩恵を受けていることに気付いていない、うつけ者だ。
身分制度を尊重するシャノンとは相性が悪く、出自の低いシャノンの義弟ブラッドをこれ見よがしにいつも連れ歩いている。何アピールだよ！
おっと、少し辛辣なのは許してほしい。こいつは僕を『絶対断罪してやるマン』なのだから。
第二の主要キャラがマーベリック伯爵子息のロイド。

モカブラウンの髪色が存在の地味さを際立たせる、地味な立場の地味な優等生だ。
父親が王様の側近である彼は、王子の小姓としてシャノンよりも早くからコンラッドに付き従っていた。いわゆる幼馴染でもある。
ゲームには、彼がシャノンからコンラッドの腰巾着（こしぎんちゃく）呼ばわりされたことを根にもっており、今でもシャノンを毛嫌いしている、と書かれていた。でも、ストーリー上でシャノンと直接絡むシーンは多くなかったように思う。
彼は主に『王子に進言』という形でシャノンを追い込む。つまり……、すべてが地味だ。
第三の主要キャラは、シャノンの義弟ブラッドとあって、ここは中々に根深い因縁がある。
ブラッドの母はシャノンの母亡きあと侯爵が娶（めと）った後妻で、ブラッドはその連れ子だ。
シャノンは血のつながらないブラッドを「まがいものの侯爵令息」と呼び、まるで下僕のように扱い、母親譲りのオレンジの髪すら「金に成り損ねた下品な髪」などと蔑（さげす）んだ。
これぱかりはシャノン、擁護できないわー。僕ですらゲーム中、「最悪だなシャノン……」と思ったものだ。
そして、最も重要なのがヒロイン（♂）のアーロンである。
アーロンは赤子のときに教会へ捨てられ、そこで保護され育てられている。
聖職者見習いとして暮らす過程で『聖なる力』の適性が分かり、神子候補としての教養を身につけるため、王命により特例で貴族学院に入学したのだ。
残念なことにアーロンとコンラッドのハッピーエンドは決まっている。

つまり残った二人は当て馬である。
その分岐内で、恋心をすっぱり諦め友情を育むのか、アーロンへの想いを消しきれず病むのか、それともピュアなアーロンの言う『博愛』のもとにハーレム要員を続けていくのか……、と行く末が変わるだけだ。
そしてそれらの場面の多くを占めるのが、貴族学院内でのウキウキスクールライフである。
彼ら三人は、アーロンを巡って恋の火花を散らす恋敵（こいがたき）であり親友同士なのだ。
そこまで思い出して、天を仰ぐ。
詰んだ……。中身が別人と言っても信じてもらえる可能性なんか0.0001パーセントもないだろう。その上、今日があの踊り場から転落した日なら、僕に残された断罪までの時間はわずか二年しかない。
あの日、病室のベッドの上で苦しみながら僕は願った。できることならもう一度元気な身体で好きなことをしたかった、と。
なのになんだってこんな……！
どうせ転生するならそこらのモブにしてくれればいいのに！　気が利かない神様だな！
生き返れど生き返れど猶（なお）わが暮らし楽にならざり、ぢっと手を見る……
僕は目の前に広げた手のひらをまじまじと見つめ――
おや待てよ？　この手のひらは落下の小傷はあれど血色も良く、肉付きもいい。
パタパタと全身をまさぐってみる。

やっぱりそうだ。前世の自分より小柄ながら、どこもかしこも健康な身体。当たり前だ。シャノンは王家と縁談が持ち上がるほど家格の高い侯爵家の息子である。それはもう美味しいものも旬の食材もたらふくお召し上がりだったに違いない。

か、鏡！　どこ!?

……恐る恐る覗いたそこには……

おおっ！　う、美しい……、前世の自分を思い出すと申し訳なさすら感じる美しさだ……。

ちょっと拝んどこう。

時間の経過とともにようやく頭に冷静さが戻ってきた。

よく考えたらひどい話だ。いくら嫌がらせをしたといっても所詮、学院内で起きた学生同士の痴情のもつれに過ぎない。犯罪行為に手を染めたわけではないっていうのに断罪だなんて。

ただ……、ただ彼の味方は少なすぎた。そして、どうしても婚約解消したかったコンラッドの、脚色された話を真に受けた王家、そしてここぞとばかりに恨みつらみを爆発させたブラッドによって、かなり誇張された話を父親は信じてしまう。その結果、「シャノンには矯正が必要である」と婚約を解消されたうえ実家からも勘当され、私財まで没収されて家を追い出されてしまうのだ。

だが追い出された先のストーリーは中盤の選択肢によって変わってくる。

一つは修道院。

コンラッドとアーロンが良好に愛を育む分岐の先にあるエピソードだ。

「二度と華やかな場所で会うことはないな。自慢の美貌も持ち腐れとは気の毒に！」

コンラッドのそんな捨て台詞と共にシャノンは質素な修道院に出家させられてしまう。王子の風上にも置けない底意地の悪さだ。

そしてもう一つは平民落ち。

アーロンがロイドと行動する分岐が多いと出てくるエピソードだ。

シャノンに腰巾着と言われ恨みを抱いていたロイドはコンラッドにこう進言する。

「立場を笠に着たシャノンからは、立場を剥奪するのが彼の成長に望ましい」と。

執念深いうえに姑息な男め。

最後が……、そう。これはアーロンがブラッドと行動する分岐が多いと出てくるエピソードだ。

「王家の血を引き、侯爵家の息子であることが貴方を歪ませる」と、ブラッドは父親を上手く口車に乗せ、シャノンを平民落ちさせようと画策する。しかし、父親はシャノンの貴族位だけはギリギリ維持させた。おかげでシャノンは社交も娯楽もないような田舎の貧乏男爵家へ嫁ぐことになる。

田舎の生活は、どれもこれもシャノンの誇りであり支えだった高貴で華やかな世界からは程遠いものだ。

ノベルの中でもチラリとしか出てこなかったが、きっとどの分岐でもシャノンは幸せにならなかっただろう。

けどさぁ、どいつもこいつも頭おかしいんじゃないの？

婚約者がいながらアーロンに入れ込むコンラッドこそが不貞行為で罰されるべきでしょーが！

それにロイドとブラッドの二人も友情を免罪符に罪のない（？）シャノンを嵌め、断罪に手を貸す

とは……、これは断罪幇助（ほうじょ）！　罪だから！

シャノンの意地悪なんて、お茶をこぼしたり教科書を破ったりドレスを汚したり宝石を隠したり……カワイイ子犬のイタズラと変わらないじゃないか！

コンラッ怒、ロイ怒、ブラッ怒、怒れる三人の男をチーム着火マンと命名しよう。

くそぅ……沸点の低い奴らめ……

ああ、断罪までのリミットは後二年。僕はどう立ち回るべきなのか？

無駄に高い天井を睨みつけ、明かりの眩しさに目を細める。

……いや待てよ？

落ち着いてよく考えたら、断罪、断罪ねぇ……

断罪されたところで何か困るだろうか？　別に処刑されるわけでも投獄されるわけでもない。もしかして、前世で最後の五年間を過ごした病院に比べれば修道院なんて余裕じゃない？

ミサ、祈り、奉仕の労働、読書、そして瞑想……、シャノンにとっては息苦しい生活だろうけど、学校、塾、読書（マンガ）、妄想……、オタクで出不精だった僕にとっては、あ、あれ？　中学時代と生活リズムがほぼ同じだと？　なら健康な毎日が送れる分むしろラッキーなんじゃ……

室内の明度が一気に上がった気がする。

そうだよ！　平民落ち！

そもそも平民しか居ない日本の平民代表だった僕に平民落ちって！　笑える！

少しアナログなこの世界なら働けば食う寝るくらいはできそうだし……。そうだよ！　バイトに

一人暮らし……、いつかは……って夢だったし！

確かシャノンは下町に部屋と、父親の恩情で当座のお金は持たせてもらってたはず……。あの背景……シャノンは狭くて何もない部屋って泣いてたけど、僕にとっては前世の自室（六畳）と変わらないからね？

あとは貧乏男爵ルートだけど、もともと僕はごくごく平均的な一般家庭の育ちだ。

節約しながらつつましく暮らすのなんか庶民的にはごく当たり前だ。

なんなら働きに出て家計を支えるくらい全然平気だし。

ノベル内に出てきてないから男爵の顔は分からないけど……、前世の自分を見慣れてるからブサメンでも多分平気。よく言うじゃない。イケメンは三日で飽きるけど不細工は慣れるって。

社交もないような田舎って……あれ？　面倒な貴族の駆け引きがなくてむしろ大歓迎じゃね？

……案外悪くないかも。

いや！　むしろこれが正解かも！

なんだか、王子の婚約者としてここに居るより遥かに気楽な未来としか思えなくなってきた。

ここは積極的に断罪されにいくべきじゃないの？

だってどうせ僕から婚約解消なんて言い出せないわけだし？　百歩譲って正当な手順で婚約解消できたとして、貴族家の息子である以上、どっちみち政略結婚の駒になるのは目に見えてるし？

高位貴族のシャノンが嫁ぐなら同じ家格の面倒くさい家だろうし？

僕は何より自由が欲しいんだってば！　せっかく病院という獄中生活から生まれ変わったのに！

こ、これは一刻も早く断罪されなくては！

断罪の舞台は、貴族学院の卒業直前、前世でいうプロムと呼ばれる卒業を祝う夜会の場。

あと二年ちょっと……、長いな。別に前倒しで断罪してくれても全然構わないのに。

そうか！　僕が意地悪を開始しないと断罪に行きつかないのか。うーん、気は乗らないけど、ここはひとつ頑張ってイジワルするしかないのか。あー、あれだ。ドレス破ったりとかすればいいんでしょ？

……これも僕が無事断罪されて王家からも侯爵家からも追い出されて自由を手にするため。

アーロンごめん。先に謝っとく！　心の中で！

そうと決めたら断罪後の生活に向けて、少し手を打っておく必要があるだろう。これはこれ、断罪フラグは断罪フラグだ。大事なのは断罪後にどう暮らすかなのだから。

ノベルの中でシャノン最後の台詞となるのが新生活への恨み言である。

まず修道院。

『ささやかな娯楽の一つもなく、食事は粗末でそのうえ味もしない。それにあんな薄っぺらい布切れ一枚で、どうやってこの雪深い北の修道院で冬の寒さを凌げばいいの！』

以下号泣……

ということは、だ。

今のうちに娯楽を用意し、食事を改善し、毛布の差し入れをすればいい。

とはいえ、ただ単に寄付をすればいい、ということでもない。

娯楽といったってこの世界にはそもそも娯楽が少ないし、ましてや修道院に煩悩を掻き立てる娯楽など論外だろう。それに食事の改善も、今日明日の炊き出しでは意味がない。食事とは死ぬまで必要なのだから。

とりあえず今すぐ着手できるのは毛布の差し入れくらいか……。その他は追々っと。

僕は部屋中の引き出しを捜索して一冊のまっさらなノートを発見すると、やることを分かりやすく箇条書きにしていくことにした。

お次は平民落ち。

このルートに台詞はない。なぜならシャノンはあっという間に、まるで前世の自分がごとく病に倒れ死んでしまうのだ。

王家があてがった質素な部屋にトランク一つ分の荷物と共に放り出されたシャノンは、父からある程度の資金を持たされていた。

けれど自分で支払いをしたことがないシャノンは、悪い人間に騙され、あっという間にお金を使い果たしてしまう。挙句、下町を襲った流行り病にかかって、侯爵家の使用人が様子を見に顔を出したときにはすでに手遅れだった……というのがこのエンド。

だがしかし！　わずかなお小遣いをチマチマやりくりしていた僕なら、もっと上手くお金を使えるし、そもそも元手があるなら早い段階で商売の一つでも始めることができる。

つまり問題になるのは流行り病のみ。
二度も病死は御免だ。つまり下町の衛生問題を解決する必要がある。
これもメモ……っと。
最後は田舎の貧乏男爵。ここで問題になるのは貧乏という一点のみである。
幸いなんという男爵家かは分かっているのだ。
『こんな田舎では満足な社交などできやしない！　王太子妃たれと教育を受けたこの僕が、こんなエンブリーの片田舎に住む無作法な男を夫と呼ぶなど……こんなことなら死んだ方がマシだ！』
以下号泣……
イヤイヤイヤ、絶対死ぬよりマシだから。一回でも死んでたらそんな台詞絶対言えないから。
社交はそもそもできないしする気もない。無作法にかけてはなんなら上回る自信がある。片田舎だっておじいちゃん家の田舎といい勝負だ。
猶予は二年、それまでにエンブリー男爵領を豊かにする下地を作っておく必要がある。
とりあえず一度エンブリー男爵とやらに会っておきたい。先んじて接触しておくのが後々功を奏すかもしれないし。
それもメモって……と。
その後、僕はノートを仕舞うと、もう一度布団に潜り込んだ。
なぜなら扉の外から誰かの近付く気配がしたからだ。
ぞろぞろと護衛を引き連れたこの様子から察するに……、多分コンラッドだ。騒動の後、王家の

馬車で自らアーロンを送って行ったくせに、一応婚約者としての礼を尽くそうと最低限の声掛けをしに戻ってきたのだろう。失礼な奴だ。普通怪我人が優先じゃない？　舐めんなよ。
ちょうど布団に潜り込んだタイミングでノックの音が部屋に響いた。
婚約者を通さないわけにもいかず、しぶしぶ許可を出す。部屋に入って来たコンラッドは、痛々しくベッドにうずもれた僕を見ると一瞬躊躇（ちゅうちょ）し、けれどまるで自分は無関係かのようにぬけぬけと近づいてきた。
「シャノン、怪我の具合はいかがか」
「……」
「なんとか言ったらどうなのだ」
「……」
「心配してわざわざこうして戻ってきたというのに……」
ウソつけ、白々しい。
「見せかけの心配ならしてくれなくて結構です。回れ右してお帰りください」って言えたらな……。
王族に向かって言えないけど。
それより問題は王子様にどう話せばいいのか……、貴族のマナーがさっぱり分からない。
布団から顔を上げて、とりあえず声を出してみる。
「お見舞いありがとうございます」
「……それだけか」

いつもの、シャノンにしか向けられることのない不機嫌そうな声が投げかけられる。
けれど、無難に今はこれが限界だ。下手なことを言ったらボロが出る……
頭まで布団に潜ろうとすると、不機嫌な声はさらに続いた。
「いつものように嫌味の一つも言わないのか？　自分を放ってあの男を送っていくとは随分紳士的じゃないか、とかな」
ほほう？　それくらいは言ってもいいってこと？　それならリクエストにお応えして、遠慮なく。
僕はベッドの上で身体を起こすと、コンラッドに向き直り、努めて冷静に、無表情のまま口を開いた。
「そう言うってことは自分の行動が正しいか正しくないか自覚があるってことですね」
「なんだと……？」
話し始めたシャノンに目をむくコンラッド。
自分で何か言えって言ったくせに、なんなん、その顔。
断罪されるのは大歓迎だが、逝ってしまったシャノンのためにせめて……、せめてこれだけは言ってやらなきゃ気が済まない。
何が王子だ！　ハッキリ言うが最低だからな？
「責めてるんじゃありませんよ？　それもこれも全部自業自得ですからお構いなく。たとえそこに立派な貴公子が三人も居ながら、誰一人僕を助けようとしなかったこともまったく気にしてません。

アーロンは大切な神子候補ですから、もれなく全員で助けるのはもっともなことです。打ち所が悪ければ僕は死んでたかもしれませんけど、コンラッド様が僕を見殺しにするのは恋する男として当然のことです」
「あ、いや……」
「僕の反射神経が鈍かったのがいけないんです。もっと筋トレしておけばよかったですね。三人のせいではありませんからお気になさらず。打ち所が悪ければ僕は死んでたかもしれませんけど、非情な三人は何も悪くありませんから」
「それは……」
「いくらなんでもまさか？　下々（しもじも）の手本たる王子様が？　あんな奴死ねばいい、とか？　人間性を疑うようなことは考えてはいなかったでしょうし、怪我人を放置して想い人を優先する、みたいな、人が聞いたらちょっとどうかと思う非人道的な行動もただの無意識でしょうし？　すべて僕の日頃の行いがそうさせたのでしょうから、全部僕が悪いんです。打ち所が悪ければ僕は死んでたかもしれませんけど、人より少し冷血なだけのコンラッド様に非は一ミリもありませんから」
「……すまなかった……」
「謝罪は不要です。僕は本気で自分が悪いと思ってるんですよ？　たとえ夏休みに入ってからの僕の誘いをフルシカトしたくせに、アーロン目当てにブラッドの誘いには二つ返事で応じて、僕のいるプリチャード邸にまさか僕の在宅時にノコノコやってくるという、デリカシーの欠片もない、紳士ってなんだっけ……と思わせるコンラッド様の姿を見て逆上したとはいえ……、押し問答なら平

地にすればよかったです」

　これはさっきから思っていたことだ。ノベルでは「階段で暴れちゃ危ないって」くらいにしか思ってなかったけど、考えてみれば非常に失礼な話である。

　僕の予期せぬ返答に、コンラッドは若干狼狽えながらも、もっともらしい言い訳を繰り広げる。

「だ、だがここには多くの家人が居る！　優秀な医者も呼べるだろう！　動揺するアーロンを送ってやりたいと思うのは当然じゃないか！　私は父からアーロンを任されたのだ！」

「ほほう？　リアルに転落した怪我人より傍観者の精神的ダメージの方が深刻だと、そう言いたいわけですか？」

「……っ！」

「僕が無事で良かったですね。いやー、死んでても化けて出たりはしませんけど、もし本当に死んでたらコンラッド様に一生消えない心の傷を負わせるところでした」

　いやほとんど化けて出てるみたいなものだけど……

「どうしました？　今の笑うとこですよ？」

　僕の指摘に返ってきたのは不自然な間だ。

　なんだ？　と思っていると、急にコンラッドの声が神妙になった。

「もしも君が重傷を負っていたら……か。とっさのことでそんなことすら頭から抜け落ちていた……」

　マジすか！　いやー、ある意味ブレないな！

「さすがにアーロンを送っていくのはロイドに任せるべきであったか……」

　――はっ！　しまった！　僕としたことがつい調子に乗って心のままに毒づいてしまった。こういうところがコミュ力の乏しい僕の悪いところだ。反省反省。こんなところで常識思い出されちゃ困るのは自分でしょーが！

「な！　いいえ！　コンラッド様がお送りするべきでした！　心優しいアーロンは僕の落下を見て、そりゃもう激しく動揺していたでしょうし！　僕のことなんか今まで通り無視してください。ええそりゃもう、ガン無視で」

　特大ブーメランだがこれでよし。断罪まではコツコツとヘイトを集めるのが、コンラッドを凹ますより優先なんだから。

「と、ともかく！　身体の節々が打撲で痛いし、どこかにぶつけたのか頭も痛い。多分足首もヒビくらい入ってる気がします。あーそうそう、手首も痛くてペンも握れないので当分お妃教育には行けそうにありません。そう伝えていただいてもいいですか」

「だが目立った傷はないと医者が……」

　ギクッ！

　中身が思いっきり庶民の僕が王太子妃教育に付いていけるとは思えない。当分出仕を休んでこの世界の常識に慣れようと思ったのに……

「……め、目立った傷がなければ無事だとでも？　受け身もとれず二階の窓から落下したのに？　一回あの高さから落ちてみます？　死にますよ？　あーイタタ、誰も助けてくれなかったんでそこ

ら中が痛い。あーイタイ」
「わ、悪かった」
「悪かったで済めば騎士はいらないんですよ！　それよりちゃんと伝言お願いしますね」
「本当に来ないつもりか」
「この状況で行けると思います？」
「……君がお妃教育を休むのは初めてのことだ。母は私を責めるだろう……」
「はぁ？　杖でもついて行けば満足ですか？」
ミイラみたいに包帯ぐるぐる巻きにして行ってやろうか！
僕の気迫にコンラッドはそれ以上の追及をやめた。
「……いいだろう。私から伝えておくとしよう。ではこれで失礼する」
「あー、そうそう。もうお見舞いとか必要ないですから」
「会いたくないということだな」
微妙に不愉快さを滲ますコンラッドに思わず眉を顰める。
何言ってんだコイツ？
「会いたくないのはコンラッド様だと思いましたが違いましたか？」
返事をせずムッとした顔で出ていくコンラッド。従者によって閉じられる扉に向かって僕はもう一回念を押した。大事なことはいつでも二回言うことが大切だ。
「二度と来ないでくださいね。絶対ですよ！」

塩！　誰か塩持ってきてーー！！
さて、今のうちに脳内に残るシナリオを思い出しながらシャノンとしての立ち居振る舞いを予習復習しなくては……

と、思っていたのに……
――はっ。予習復習していたはずがうっかりうたた寝してしまっていた。時刻は深夜、食事をし損ねてしまった身体はお腹の限界を訴えている。
亡くなる直前の僕は、点滴でしか栄養を取れなかった。そのせいか、現在僕は食事への欲求が大変なことになっている。明日の朝までなんてとても待てそうにない。
そっと扉を開け……抜き足差し足忍びあ――
「兄さん」
ドキィ！
足を止め、振り返ると、そこには義弟のブラッドが居た。
「こんな時間にどこへ」
こいつめ。シャノンが嫌いならいちいち声かけないで放っておけばいいのに、スルースキルの低い男だ。
「お腹が空いて……」
「いい加減なことを」

ホントだっつーの。それより厨房はどこだろう……。ハムとか果物とか、そのまま食べられそうなものはないだろうか。

「誰かお呼びになればいいでしょう。なぜここに？」

あっ……、そ、そういう仕組みね。一個覚えた。

焦っていると、ブラッドがこちらを怪訝そうに見つめている。

「いつもならたとえハンカチ一枚でも僕を呼びつけて取りに行かせるではありませんか」

そんなことしてたのかシャノン……。ひどいな。

「き、今日はこれ以上誰にも迷惑かけたくなかったので」

「ではご一緒します」

「え……、お構いなく」

「どういう風の吹き回しですか？　何を企んでいるんです？」

僕の返事に、ブラッドの眉間の皺はどんどん深くなっていく。

拗らせている……。ひどく拗らせている。多分、僕の今までにない行動が彼には怪しく思えて仕方ないのだろう。

ただ、ブラッドに関してはさすがに分からないでもない。だってシャノンのブラッドに対する態度はあまりにも良くなかったし。

ただ、どう取り繕ったところでどうせシャノンとブラッドの仲が改善することはないだろう。

それに断罪のためには嫌われてなんぼなんだから……、うん。この際ノベルの感想でも言っとくか。

「いちいち僕のことなんか気にしなけりゃいいのに」

「え……？」

「何を言われようが気にしなければいいんだよ。シャ、僕に逆らったからって何も困らないだろうに」

「何を言って……」

家内の権限は所詮父親にあるんだし？　その父親は溺愛するシャノンでさえ、人格矯正のために家を追い出すくらい厳格なわけだし？　シャノンの我儘をスルーしたってブラッドを理不尽に罰したりは、……多分しない。ような気がする。

つまり、よく考えたらシャノンが何を言ったところで、家庭内の雰囲気がちょっぴり悪くなるだけで大して困らないじゃないか。

ならシャノンが何を言おうが、まるでうるさい小舅のようだ……とでも思って流せばいいのに。いちいち構うから拗れるんだって！

「嫌味言われたからってなんなの？」

あーあ、怖い顔して。ブラッドは自分だけが辛い気でいるが、シャノンの立場になってみれば言いたいことの一つや二つや三つや四つはあるのだ。

「僕が嫌い？」

「好かれているとでもお思いですか……？」

「でもそんなのお互い様だから」
「な……！」
「そもそも子供の頃からコンラッド様がシャ、僕をハブってブラッドだけ連れて行くのをどんな気持ちで見てたと思う？　そんなに好きなら僕じゃなくてブラッドと婚約すればいいのにって思ったよね」
「兄さん！」
思ったのはついさっきだけど。
僕の言葉に一瞬動揺を見せたものの、ブラッドはすぐさま反論してきた。
「仕方ないじゃないですか。兄さんには王太子妃教育があったのですから」
「そう、仕方ない。コンラッド様が僕にニコリともしないで『ごきげんよう』って言った直後、ブラッドの手を取ってこれみよがしに満面の笑みで『さあ行こうブラッド』って言うのも仕方ない。勉強が終わったら合流しようと思っても、僕が動物苦手なのを知ってて、いつも嫌がらせみたいに偶然狩場に居たのも仕方ない」
三人の蛮行には、長い入院生活でいろいろ達観してた僕でさえドン引きしたものだ。
どう考えてもありえないから。
言葉にすることでプレイ中の感情が次から次へと蘇ってくる。
いい機会なので、僕はブラッドにそのまま愚痴り続けた。
「放置される気持ちをブラッドが分からないのも仕方ないし『兄さんも一緒に』って言葉が出ない気の利かなさも仕方ない。なら僕がイライラして八つ当たりしたくなるのも仕方ないって思わない？」
「コ、コンラッドが兄さんを敬遠するのは、兄さんがつんけんしていたからではないですか。そう仰るならもっと可愛げのある態度をおとりになればよかったものを」
ギクッ！　バレたか……
「れ、連日のお妃教育に疲れ果ててたんだから仕方ないでしょーが！　あー、いいよね、王子のオキニたちは！　いつも王子と遊ぶだけで！」
これを逆ギレと言う……。ええい！　何が悪い！
「だ、だいたいさあ、母を亡くしたシャ、僕の目の前で母さん母さんって甘えまくって……その無神経さも僕は仕方ないって思わなきゃいけないかなぁ？」
その言葉はさすがにブラッドの胸へと刺さったようだ。
「そ、それは……」
彼が怯み、一歩下がった姿に勝機を見出す。
まぁ、ゲーム内にシャノンが気にしてた描写はなかったけど……だからといって普通に考えてアレはないよね。
じっと見つめていると、ブラッドは居心地悪そうに体を揺らし、それでも負けまいと言葉をひねり出した。
「だけど兄さんは僕をまがいものの侯爵令息と呼んだ！　許せるとお思いか！」

「し、仕方ないよね。母親も婚約者も、シャ、僕の欲しいものは全部ブラッドのものだったんだから」

「こ、婚約者は兄さんのものでしょう」

「はぁぁ？　それ本気で言ってる？」

「……っ」

だよねー。その婚約者を独り占めしていた奴が何を言う！

「それでもあなたが許せない！　たとえ八つ当たりでも僕を使用人のように扱っていいはずがない！」

うっ！　それを言われると……

これに関してはどうやっても庇いようがない。ええい！　こうなったら奥の手だ！

「で、でで、でもブラッドは商家でも出戻った子爵家でも、もっとひどい折檻されてたよね？」

「……っ！　誰からそれを……」

「だ、誰でもいいでしょーが！」

あ、これはノベルのテキスト情報、ブラッド登場時のミニ説明ね。

彼の生家である商家の祖父母は、幼子に読み書きやマナーばかりを教える貴族出の母親に「気取った年増の貴族女」と毎日嫌味を投げつけ、孫であるブラッドにも辛く当たっていた。

さらに、稼ぎはいいが下半身のだらしない父親は、ある日身重の若い愛人を家に招き入れると、「二人目も産めず、店に出て客あしらいもできない気取った嫁はいらん！」そう言って親子を追い出したのだ。

なのに出戻った子爵家でも、暇を告げられた母親は「役に立たない出戻り」と呼ばれてひどく邪険に扱われた。困窮した子爵家は商家に借財があり、彼女は返済を猶予するための担保だったのだ。当然ブラッドの存在も「食費がかさむ！」と嫌がられていた。

そこに降ってきた幸運。ある夜会で母親が地位もお金もある真のセレブに見染められたのだ。そう。シャノンの父親だね。

「とにかく！　その折檻より僕のささやかな八つ当たりの方が許せないっておかしいでしょーが！」

どうだ！　この「僕よりもっと悪い人がいます」のなすりつけ攻撃は！　ああ！　なんて自分本位な断罪令息！

言葉に詰まった彼がフリーズしている今がチャンスとばかりにそーっと後退する。

お腹を空かした僕がブラッドを放置したまま食料を探して階下へ降りるのも、もちろん仕方ないよね？

だがしかし、事故から五日。その日は朝っぱらから屋敷内がバタバタしていた。どうやら屋敷の主であるシャノンの父親が、急遽単身赴任から戻ったらしい。

そして、厨房における僕の暴挙は、父親まで巻き込んだ大事になってしまった。

「シャノン……、真夜中に厨房でナイフを握りしめたまま何をしておったのだ……」

ビクッ！
王都邸からの知らせを聞き、丸三日休むことなく馬を走らせた父親は、なぜか事故の件よりも厨房の件を突っ込んできた。
やっぱり侯爵令息が厨房でつまみ食いは非常にマズかったようだ。
「あの……、その……」
美味しそうなハムがあったのでバレないように切り分けて部屋で食べようと思いました、って言えたらな……
結局キッチンメイドに見つかって大騒ぎになったせいで、一口も食べられず泣く泣く部屋に戻ることになったのだが。
ああ、今目の前にあるのはあのときのハム……。どれほど待ち遠しかったことか。
深刻そうな顔で僕を見る父に愛想笑いを返し、僕はフォークを握りしめる。
「そんなのどうでもいいじゃないですか。早く食事にしましょう。わー、美味しそうなハムエッグ！」
やっと会えたねハム……。いっただきまーす！
「シャノン！　あ、ああいや……、いいのだ、そうだな……、美味しそうな朝食だ」
あれ？　誤魔化せた？　怪我人だから流してくれたのかな？　良かった……
大喜びでハムを口に運ぶと、父は可哀想な子を見るような表情をしている。ヤバ、少し食い意地張りすぎたか……

父親はゆっくりとため息をつく。
「シャノン。今回のことだが王家には私から苦情を申し立てておこう。婚約者であるシャノンをこまでないがしろにするとは……けしからん！」
「おとうさ……ま？」
呼び方はお父様で良かったよな、確か。
っていうか、マズいって。なにこの展開。僕は断罪されなきゃいけないんだってば！
今まで散々放置してきたんだから、これからも放置でいいじゃん！
そう思いつつ、ハムエッグを切る手を止めて、父を見る。
「何も言わなくていいです。このままで」
「だがシャノン……」
「いいんです本当に……。むしろ褒めてあげてください。民の上に立つ王子殿下が庶民のアーロンを優先する、こんな立派な振る舞いがあるでしょうか？　僕は満足です」
「……そうか分かった。ではお前の気持ちを汲んで強くは言わぬ。それで良いのだな？」
「はい」
これでよし。うっかり父親が不敬を覚悟で婚約解消だ！　なんて言い出したらもっと大変なことになる。見ず知らずの高位貴族家へ嫁に出されるくらいならノベル通り断罪一択でしょ。
僕の最終目標は、社交界から離れたところにある自由なんだから！

さて、朝食という名の個人面談さえ終われば後は自由な時間だ。
とはいえ、歩けないのを理由にお妃教育をサボっている以上フラフラ外へ出ては行けない。
邸内でできることをコツコツやっていくしかないだろう。
侯爵令息であるシャノンにはなんでもしてくれる従者がいる。この従者をすっとばしてブラッドを小間使い代わりにするんだから、彼が腹を立てるのも無理はない。
シャノンの従者カイル、部屋付きメイドのルーシーたちとは顔合わせを済ませてある。
事故後の動揺で挙動不審のごまかしがきくうちにコミュニケーションを図っておこうと思ったのだ。
そしてそれは大正解。僕たちは数日ほどでかなり打ち解けていた。
「その手紙は私が開封します！　ペーパーナイフをこちらに！」とか、「前髪を切るのはメイドの役目です！　ハサミをこちらに！」とか、やや過剰に過保護な気がしないでもないが、怪我人や病人相手ならこんなもんだろう。前世でも覚えがある。

今日も、自室に戻った僕は彼らと親交を深めていた。
「ねぇカイル、ルーシー、修道院に寄付とかするにはどうしたらいい？」
「お申し付けくだされば私が手配いたしますが……、どの修道院にしましょう」
「えっと……」
あれはたしか北の修道院、としか出てこなかったような……

「北部の修道院全部に。冬が来る前に温かい毛布を贈りたい」
「北部ですか……、お調べしますが何か所もあると思われますよ？」
「ついでにマットも差し入れたい。あ、マクラも」
快適な睡眠のために寝具はとても大切だ。元入院患者の僕が言うんだから間違いない。
「そうなりますとシャノン様のお手持ちで足りるかどうか」
「あら、寄付でしたら旦那様も遺産を持ち出すことを駄目だとは仰いませんわ、お願いすれば大丈夫ですよ」
すべきことはいろいろあるが、その第一歩がまずこれだ。それにしてもシャノンのお手持ち？つまり自由になるお小遣いってこと？
「僕のお小遣いってどれくらいあるの？」
「本年度の残り額ですか？」
カイルが言うにはシャノンは母親から莫大な遺産を受け継いでいる。だが成人していない彼はまだ自由にそれを使うことができない。そこで一年に一度父親から結構な額のお小遣いを貰うのだが、なんでも今年の分は高価なルビーを買うのに使ってしまい、もうあまり残っていないのだとか。そういやシャノンの趣味って宝石収集だっけ……
ってことは、今自由に使えるお金は少ししかないってこと？　少しの定義に、庶民の僕とはかなりズレがあるだろうけど。
そこで、ふと思い出した。

断罪後、シャノンの私財は王家ゆかりのものは王家に、それ以外のものは侯爵家に没収されてしまうんだった。だから平民落ちルートでは、父親の温情によって当座の生活費だけ渡されるんだよね。

……ならいっそ二年間で使い切るってのはどうだろう。

シャノンのものは僕のもの。間違っても王家や侯爵家のものではない。僕の未来のために使い切って何が悪い。はい決定！

寄付って言えば引き出せるわけね、一個覚えた。けど、それとは別に自由に使えるお金として現金を持っておきたい。庶民な僕は現金がないと落ち着かない派だ。もー！　シャノンってば宝石爆買いとか……

いや？　そうか宝石……、僕のものなら売ってもいいよね？

「ねぇカイル、宝石売るにはどうすればいい？」

「もしや……、例のルビーをお売りになるのですね？」

「……ん？　あ？　ああ、うん」

例のルビー？　なんじゃそりゃ。あっ！　生返事をした次の瞬間、ゲームの画面が頭にパッとよみがえった。

――『茨姫（いばらひめ）』。

コンラッドはシャノンのことを周囲にいつもそう呼んでいた。

そしてその呼称はいつしかシャノンの通称になった。

コンラッドはシャノンの誕生日に毎年大きなバラの花束を抱えてきたのだが、その花束には、いつもトゲが付いたままだった。

こんなの嫌がらせ以外のなにものでもない。

そもそも、『茨姫』という名前は表向き「薔薇のように美しい君を表す名」ということになっているけど、本当はその名の通り「棘々（とげとげ）しい」という意味だからね？　本当に失礼な奴だな！

それを踏まえて……、貴族子女は学院入学を機に夜の社交も解禁となる。

当然夜会でシャノンをエスコートするのは婚約者であるコンラッドの役割だ。

なのに、春にプリチャード邸で開催されたシャノンの十五歳を祝う夜会に、コンラッドはよりにもよって、アーロンを伴い参上したのだ。

そしてアーロンの胸には王家の石と呼ばれるルビーのブローチが輝いていた。コンラッドからの贈り物として。

シャノンに持参したのはいつもの花束だけだったのに。

脳裏に浮かんだのは、頬を上気させたアーロンと誇らしげなコンラッドのスチルだった。

あのエピソードがあったからこそ、シャノンは宝石商を呼びつけ高価なルビーを買い入れたんだろう。憂さ晴らしというか、当てつけというか。

納得したところでカイルに微笑みかける。

「……ある意味邪気のこもったルビー。だからもう持ってなくていいかな」

「シャノン様……、すぐに手配いたします！」
これで金策はよし。
むしろ有効活用できて良かった。
あとは下町に行って……と考えていたところで部屋にノックが響いた。
ルーシーがドアを開けると、黒い燕尾服を身に纏った老人がかしこまっている。
――おや？　ベタな名前の執事、セバスが一体僕になんの用だ？
「シャノン様、コンラッド殿下がお見えでございます」
はぁん？
「ブラッドならここにはいないけど」
「いえ、シャノン様の見舞いにと。ロイド様もご一緒ですが」
……聞き間違いかな？　あれほど来るなって念押ししたのに。
あ、もしかしてあれかな？　来るなって言ったから逆に嫌がらせのつもりで来たとか？　性格の悪い……。こんなのが王太子になってこの国大丈夫か？
「仕方ない……。お通しして。あ！　ブラッドを探してさっさと全員連れてけって伝えて！」
王子が相手では居留守を使えないのが辛いところだ。

ギスギスした雰囲気の中、王子殿下とその側近たるロイドの登場である。
僕とロイドは初顔合わせだ。シャノンじゃなくて僕はね。

「やあシャノン、あれから一週間か。具合はどうだ？」
「最悪ですね。腰は痛いし肩はこるし、足もなんだか浮腫んでます」
単なる寝過ぎだが、そんなことを言う必要はない。
コンラッドに視線を向ければ、彼は不可解そうに首を傾げる。
「骨に異常はなかったのだろう？　ブラッドから聞いた。君があの晩歩いていたと……」
ブラーッド！　そんな家庭内のささやかな出来事まで報告するんじゃない！　プライバシーの侵害だっての！
「……たった今具合が劇的に悪化しました。そろそろお帰りください」
一刻も早く、この不愉快なお見舞いを強制終了しようとしたが、コンラッドはなぜか神妙な顔をしている。
「シャノン、その、君はあの晩……」
「よせコンラッド。シャノン、どれほどしおらしくしようが私は騙されない。同情を買えばコンラッドの気を引けるとでも思ったんだろう。そもそも今回のことだって勝手に暴れて勝手に落ちただけだ」
「やめないかロイド！」
ロイド……、シャノンが嫌いなのは分かったけど怪我人相手にその態度はちょっと……ないわ～。
だからアーロンに見向きもされないんだって。
言っておくけど僕は王子に執着したシャノンと違って断罪希望だからね？　守るものがないって

ことは、無敵ってことだから！
「えーと、勝手に暴れて勝手に落ちたのは否定しませんけど……、マーベリック伯爵家では大した貴族教育をしてるんですね。僕の常識では怪我人相手に暴言を吐くっていうのは貴族どころか人としてありえないですけど」
「そ、それは失礼した。だが屋敷を歩き回っていたなら実際はもっと軽傷ということじゃないか」
「だとしてロイド様に何か迷惑かけました？」
「え……？」
「ロイド様に関係あります？」
「い、いや……」
「僕の奇行でロイド様に不都合が？」
「……」
言い返せないなら言うな！
黙り込んだロイドを助けようと、コンラッドが割って入る。
「ではシャノン、お妃教育にはいつから出仕するのだ。母が心配しているのだが……」
「イタ、アイタタタ、痛いわー、タンコブが痛い。まだ当分無理ですね」
……むしろ延長したいんですが。もう一回窓から落ちようか……
慌てて足をさすると、途端にロイドが息を吹き返す。
「ほら見ろコンラッド、これは仮病だ。グズグズと理由をつけて出仕を拒んでいるに違いない！

不敬だぞ！」
なんだと!?
そもそも、僕にはロイドがなぜシャノンをあれほど嫌っていたのか分かっていない。
コンラッドが勝手に決められた婚約者を好きになれないのもしょうがないし、ブラッドがシャノンを嫌うのも分かる。
でもこのロイドとシャノンは、ゲーム内ですらほとんど話したこともないんだけど？
あ、あれか？　口もきかない、イコール、馬鹿にされてるって図式？　え？　被害妄想もいいとこだって！
……本物のシャノンはどうだか知らないけど……ええい！
「仮に僕がお妃教育をサボっているのだとしてむしろ皆さんにとっては好都合じゃないですか。王宮で僕の顔を見なくて済むならコンラッド様も清々するだろうし？　そもそも僕がいなきゃ遠慮なくアーロンを王城に呼んで楽しくやれるし？　良いこと尽くし。誰か困ります？」
あ、講師の先生方が困るか。でも叱られるのは僕なんだし。なんだろ？　コンラッドがバツの悪そうな顔してる。あ、図星か！
二人を一刀両断したところで、それでもロイドは性懲りもなく、僕を遣り込めようとしてくるじゃないか。
ん？　まだ何か言うつもりか？　粘着質だなロイド。そういやノベルのロイドも、アーロンがコンラッドと結婚した後も理由をつけては会いに行ってたっけ。ストーカー気質め……

「そういう問題ではないだろう」
「しつこいですね……、もしかして僕を出仕させたら金一封でも出るんですか？」
「ばかなことを」
「じゃあ口挟まないでください。あ、それとも……」
「なんだ」
「嫌よ嫌よも好きの内……、ロイド様、それほど僕に会いたいんですか？」
「くだらないことを言うな！」
「ですよねー。じゃあ口出し無用で」
遅いなセバス！　早くブラッド連れて来いってば！

さっさと出ていってほしくてイライラしていると、俯いたロイドは尚も僕に食い下がってきた。
「……そうやって私を馬鹿にして、今も陰で笑っているのだろう！　無能な腰巾着と！」
小刻みに身体を震わせながらロイドはこちらを見おろす。
あー……、そういやそうだった。えーとここはなんて誤魔化せば、って……待て待て、フォローしてどうする。
むしろここはかぶせるところでしょうが。予定通り断罪されるためには！
「無能を無能と言って何が悪いんですか？」
「なんだと！」

「僕がロイド様を無能……と呼んだ記憶は曖昧ですが、そう言ったのだとしたら理由があります」
その言葉を受け、さすがに自らの側近を悪く言われるのは気分が悪かったのか、コンラッドがロイドと僕の間に進み出た。
「聞き捨てならないな。ではその理由を聞かせてもらおう。大切な側近のことだ。馬鹿にされたままでは許しがたい」
「いいでしょう」
ノベルのときから思っていたが、見たところロイドは非常にネガティブで自己評価の低いキャラだ。だからこそ彼はなんでも優しく肯定してくれるアーロンに依存してしまうのだろう。
だが僕は……、大変申し訳ないが、断罪のためにあえて傷口に塩を塗らせてもらう！
「ではロイド様にお聞きします。無能と言われたのが不満ですか？　ではあなたは自分自身を有能だとお思いになれますか？」
「っ……」
言葉の真意を測りかねたコンラッドは様子を窺っている。僕はロイドから視線を外さずさらに続けた。
「ロイド様。あなたはどれだけ優秀な成績を収めても、いちいち周囲と比べて自分の欠点を探す。つまりご自分を卑下なさってばかりいるから無能だと言ったんです」
「な……」
「自分で自分の能力をお認めにならない限り、永遠にあなたは無能です。お分かりですか？」

「……そ、それは……」
ロイドが自信家になる日はきっとこない。ということは、未来永劫ロイドは劣等感に苛まれて生きていくのだ。それをこんな形で知らしめるなんて……
ああ！　なんて性格の悪い断罪令息！
「言っておきますけど僕はロイド様を見下したことなどありません。そう見えたならそれはロイド様自身の問題です。自分の劣等感まで僕のせいにされるのは……、ハッキリ言って迷惑です」
多分本物はめっちゃ見下してた気がするけど……
「そもそも、ロイド様のお立場はなんですか？　コンラッド様の側近ではないのですか？　耳触りのいい言葉で機嫌を取るだけなら腰巾着でどこが間違ってますか？」
「だ、だが」
「ものには言い方があるだろう、シャノン」
「僕に『茨姫』とか名付けた人は黙っててください」
「うっ……」
目くそ鼻くそだからね？
「腰巾着……、そう言われるのが嫌ならどうしてコンラッド様に忠告しないんですか？　僕に対する子供じみた真似も、嫌がらせみたいな真似もよせって。……シャ、僕は王家から認められた婚約者であるはずなのに、コンラッド様から直接お誘いを受けたこともあの棘だらけの花束以外の贈り物を受け取ったこともない。婚約者の振る舞いとしておかしくないですか？　ああそうそう、婚約者の僕ですら夜会に同伴したことがないのに、それより先にアーロンをエスコートするのはいくらなんでも無作法だ、とかもね。言わないんですか？　普通に考えてあり得ないですよ？　そういうことを忠言するのが側近の役割だと思いましたが。一緒になって笑ってましたよね？　いや、普通にないから」
見よ！　この一気に二人とも凹ませる、畳みかけるような正論の連打！
「NOが言えないならやっぱり腰巾着で良くないですか？」
かなり卵とニワトリが逆だけど……
「反論があるなら聞きましょうか」
「……」
「……」
勝者シャノン！
二人は黙り込み、互いに視線を泳がせている。
そこへようやくセバスが吉報を運んできた。
「シャノン様、ブラッド様がお戻りになりました」
ナイスタイミング！
「ですって。出口はそちらです。ああそうそう。今日のお見舞いで傷口が開きました。お妃教育のお休み期間は延長の方向でお願いします」
「一体なんの傷口だろうか」

ドサクサに紛れるのは無理だったか……

「こ、心の」

「……そうか」

ここでノック音と共にブラッドの登場だ。だがブラッドが部屋に足を踏み入れるより先に、二人は僕の眼力によって圧されるように部屋を出ていった。これだけ言っとけば相当ヘイトもたまったことだろう。

これで断罪も安泰だ。

◇◆◇

「ロイド、ではまた明日」

「ああ。王城で」

コンラッドと別れ帰路につく私――ロイドの胸には、言いようのない感情が押し寄せていた。

私の父は王の側近、宰相殿の補佐を務める、マーベリック伯爵家の当主である。だが、当家は幾人かいる側近の中で最も家格が低い。

それは、私の心に灯った最初の劣等感だった。

王子とほんの数週間違いで生を受けた私は三歳になると、王子殿下の小姓という大変な名誉に与った。それは幼心にささやかな優越感をもたらした。

しかし五歳のとき、シャノンの母、王族筋であられたカサンドラ様が病床に臥したときにそれは一変した。

シャノンが、王子殿下の婚約者として私の遥か高みに現れたのだ……

噂通りの美しい顔立ち。だがどこか冷たく居丈高なシャノンをコンラッドは好まなかった。

その事実に、私はまたしても安堵と優越感を得た。

連れ立つ私たち三人の背中を、シャノンがもの言いたげな目で見ていることは気付いていた。気付いていたが……、私がコンラッドに何かを言うことはついぞなかった。

私は殿下をお支えする側近となる者。これは主たるコンラッドの望み、臣下として当然のことだ、そう自分に言い聞かせて。

そんなある日、苛立ったシャノンの声が私の耳に聞こえてきた。彼は従者に向かってこう言い放った。「あの無能な腰巾着を僕より重宝なさるなんて……、コンラッド様は何をお考えなのか」と。……廊下を曲がった角で私が盗み聞いているとは気付きもしないで。

シャノンの発した『無能の腰巾着』という言葉は棘となって私の胸に突き刺さり、それ以来、ことあるごとにチクチクと私を苛んだ。

常に私を苦しめる劣等感。それは何をしようと何年経とうと消えることはない。

そんなとき、誰も来ない校舎の裏で、私に声をかけてきたのがアーロンだ。

アーロンはとても気安く、そして教会の侍祭らしくとても純粋だ。

彼からかけられる励ましは、まるで甘い蜜のようにいつでも私の心を溶かしていく。
以来私は落ち込むたびにアーロンの姿を探し、彼からの言葉を強く望んだ。
アーロンは言う。
「ロイド様はそれでいいのです」
「何も間違っておりません」
「誰であろうとロイド様を見下すことなどできません」
甘美な言葉の数々……
アーロンへの愛情が増すごとにシャノンへの嫌悪も増していく。
だがあの日、シャノンがあの大窓から転落したときから……、あの揉み合いの中でシャノンを押したのは自分なのではないかという、一抹の疑念を私は払拭できないでいた。
だからこそあの場に居るのがいたたまれず、私はアーロンを送ると言い張り、無理やりコンラッドの馬車に乗り込んだのだ。
帰宅してからも消えない後ろめたさ。
一言謝ればよかったのか……。だが、謝れば押したと認めることになる。ハッキリそうだとは私にも言い切れない。確証もなく謝るのは筋違いだ、と口を噤んだ。
……それでも数日後、シャノンを見舞うコンラッドを一人で行かせることはできなかった。
そこには私たちへの感情などまるで抜けきったかのように、ひどく冷めた様子のシャノンが居た。
狼狽えた私は思わずシャノンに向かってひどい言葉をぶつけてしまったが、それは後ろめたさの裏返しでしかない。
そんな姑息な考えなどあっさり看破し、シャノンは淡々と私の言葉を切って捨てる。
開き直ったシャノンは今まででは考えられないような言葉で私を責め立てた。
そのひどく小馬鹿にした物言いに思わず過去が蘇る。私はいつの間にか、コンラッドの前では決して言うまいと思っていた憤りを口にしていた。
『無能な腰巾着』……私を苦しめる過去の呪縛。だがシャノンはあっさりとその言葉を認めたのだ。
ただ一つ違ったのは……、その言葉の持つ真の意味だけ。
――能力、それを決めるのは他者の評価だと思っていた。だからこそ私は努力したのだ。第一王子殿下の側にいることを「彼ならば当然だ」と、誰からも認められるように。
ただ歳が近かったから選ばれた……、口さがない者にそう言われるのが嫌だったから。
それでも、シャノンの発したあの言葉が胸から消えたことは一日もない。
シャノンは言うのだ。自分で自分を認めない限り、私は永遠に『無能』なのだと。
ああ……、そうなのかもしれない。足りないものなど探せばいくらでも見つけられる。自分の能力を自分自身で認めたとき、そのとき初めて私は『有能』になる。
私は私自身の劣等感をシャノンのせいにして、奥底にある己の問題から目を背けていたのか。
アーロンの甘い励ましで自分自身を誤魔化しながら……
そして、続くシャノンの言葉はもっと私の頭を打った。

立ち読みサンプル
はここまで